The Learner

Doshisha International Academy Elementary School

September ISSUE

September, 2022
Volume 126

秋学期を迎えて

秋学期が始まりました。この夏休み期間中には新型コロナウイルスの感染者が過去最高を記録し、相変わらず感染リスクに警戒しなければなりませんでしたが、児童たちが一回り成長した元気な姿で DIA に戻ってきてくれて、大変安堵するとともに、とても頼もしく感じました。

さて、秋学期はたくさんの学内行事が予定されています。秋といえば、昔から読書や勉強の秋、スポーツの秋と言われます。確かに、秋は気候が涼しくなってきて、勉強やスポーツなどに集中できるようになりますので、本校の子どもたちには、自分の得意分野にますます精励し、すばらしい成果を残してくれることを大いに期待しています。

勉強や習い事、スポーツなどで頑張った成果というのは、コンテストやスポーツ大会などで人と競い合うことになります。秋学期の始業礼拝の際に、私が子どもたちに向けて、自身の剣道の修行を通じて会得した競争する意義や心構えについてお話しいたしましたので、保護者の皆様にもお伝えさせていただければと存じます。

「皆さんは、例えばスポーツ大会に出た時に、絶対勝ちたいですか？負けた時はとっても悔しいですか？あるいは、負けるのが嫌なので出たくないですか？

実は、私は皆さんと同じ小学生の頃から剣道をやっています。剣道を見たこともやったこともない人がたくさんいると思いますが、竹刀という竹でできた刀のような道具を使って、鎧のような防具を着けた相手の頭や腕、お腹などの部分を叩いて、面、小手、胴などの技を競い合う武道の一種です。つまり、柔道や空手、相撲などの仲間です。

この剣道を長くやっている（修行している）人は、試合に勝っても喜ばないし、負けても悔しがりません。サッカーやテニス、卓球、バレーボールなどは、勝ったらガッツポーズを取ったり、大きな声を出したりして、喜びを全身で表しますから、剣道をやっている人はなぜ喜ばないのか不思議ですね？

もちろん、心の中ではうれしいのですが、もし剣道の試合で技を決めた時にガッツポーズを取ると、審判の人は、相手に失礼な見苦しい行為と判断して、せっかく取ったポイントを取り消してしまいます。この考え方を「武士道精神」と言います。

私は小さい時から、剣道の先生に「勝って反省！負けて感謝！」と指導されました。試合に勝ったのは、今の自分が相手よりたまたま強かっただけで、まだまだ足りない所がいっぱいあるはずだから反省しなさい！ましてや、負けた時は相手に自分の弱いところを教えてもらったのだから、悔しがったり、恨んだりしないで、心から感謝しなさいと教わりました。

剣道では、「礼に始まって、礼に終わる」という慣習があり、試合が終わった後に、勝った人と負けた人がお互いに「ありがとうございました」と言って、深々と頭を下げてお辞儀をします。

したがって、皆さんもいろいろなコンテストやスポーツ大会などに出た時は、「勝って反省、負けて感謝」して下さい。そうすれば、仮に負けたとしても、悲しくも悔しくもありませんし、必ず自分を成長させてくれる新たな課題を見つけ出すことができると思います。」

校長　柳田　昌彦

同志社国際学院初等部
〒619-0225 木津川市木津川台 7-31-1

Doshisha International Academy Elementary School
7-31-1 Kizugawadai, Kizugawa City 619-0225

http://www.dia.doshisha.ac.jp

キリスト教 教育テーマ
9 月：調和　September：Harmony

「…『心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。…
隣人を自分のように愛しなさい。』この二つの戒めに、律法全体と預言者とが、かかっているのだ。」

マタイによる福音書 22 章 37－40 節（聖書協会共同訳）

夏休みにキリスト教学校教育同盟主催で全国レベルの聖書科研究集会があり、長崎まで行ってきました。

姜尚中氏が院長・学長を務めておられる鎮西学院を会場として、氏の講演を聞いたり長崎の原爆資料館を見学したりして平和について思索を深める研修会でした。高校生の平和大使の体験談など、有意義なお話をたくさん聞けた中で、私がこの度の研修で最も感銘を受けたのは第二次世界大戦よりも更に昔へとタイムスリップすることになりますが、長崎市の外海（そとめ）地区を見学した時のことでした。

長崎には潜伏キリシタンの関連遺産が数多くあり、外海地区もそのうちの一つです。日本がまだ禁教時代にあった頃、プティジャン神父が長崎入りし、外国人居留地に大浦天主堂を建てて、ひたすら日本人信徒が現れるのを待っていました。一ヵ月ほど経ったある日、突然潜伏キリシタン達が教会を訪れ、「我らの旨、あなたの旨と同じ。」と、プティジャン神父に告げました。ヨーロッパから決死の覚悟で異国にやって来た神父が、禁教下の 200 年間信仰を守り通した信徒たちと奇跡的に対面した、「信徒発見」と呼ばれる感動的瞬間です（なんと、土産物屋で地酒の名前になっていました！）。その後もしばらくは神父や潜伏キリシタンに対する迫害は続きますが、1873 年、明治政府が遂に禁教令を解いた 6 年後にフランスから来日し、この元潜伏キリシタンらの生活に寄り添いつつ地道に働き、彼らの土地で生涯を閉じた神父がいました。それが、私が今回外海地区で出会った「ド・ロ神父」（Father de Rotz）なのです。

外海地区は潜伏キリシタン達の居住区だったところで、出津（しつ）集落と大野集落があり、我々が訪れたのは出津集落です。ここにはド・ロ神父が設計し、地元の大工や信徒らと協力して建てた「出津教会」や、「旧出津救助院」などの建物があります。「出津教会」はその地方のどこの家からでも眺められるところに建っていて、まさに日本人信徒たちの心の拠り所でした。カトリックの聖堂としては驚くほどシンプルですが、これはこの地域の暴風雨に負けない質実剛健な造りになっていることと、貧しい信徒たちが後々建物の修繕費で苦労することのないように、という配慮からなのだそうです。また「出津救助院」は、ド・ロ神父が村人の貧困を救いたいと思い、特に夫や息子を海難事故で亡くした女性たちなどに仕事を与えるため建てた授産施設です。素麺（今でもド・ロ素麺として売られる）やパン、醤油、製糸や織物など幅広く製造し、丁寧に作られた質の良い製品は外国人居留地では特に人気があったそうです。実際に建物の中を見学させてもらいましたが、二階へ上る階段がなだらかな上に角に丸みを帯びているのは、そこをしょっちゅう上り下りせねばならない女性たちのことを考えて設計されていたからで、これは当時の技術としては非常に珍しく斬新なものだったようです。「ド・ロ様の優しさがよくわかります。」と、ガイドさんから説明を受けました。私がもう一つ感心したのは、100 年以上経った今でも健在な「ド・ロ塀」の存在です。当時、日本で石を積み上げる時にはアマカワという接合剤を用いていましたが、雨に打たれると脆くなる弱点がありました。そこでド・ロ神父は赤土を水に溶かして石灰と砂をこね合わせたものを用い、地元の自然石を不規則に積み重ねて丈夫な塀を考案しました。それがここまでの長い年月、びくともしないで建っているのです。

ド・ロ神父は出身地フランスでは貴族の家柄だったそうですが、宣教師として日本に来てからは一度も帰国することなく、長崎の農村地帯に住む貧しい日本人信徒たちのために私財を投げ打って数々の施設を作り、最後は出津の共同墓地に埋葬されました。

Christian Education Committee　チャプレン　石川眞弓

Marc Marie DE ROTZ

引用文献：「旧出津救助院」「ド・ロ神父記念館」その他パンフレット
「そのとき風がふいた―ド・ロ神父となかまたちの冒険」
漫画　ニューロック木綿子、監修　中濱敬司　オリエンス宗教研究所

＜お知らせ＞
・9 月のおにぎり献金は 9 月 13 日（火）です。感染症予防のため封筒などの小袋に入れて、お子様に献金をお持たせください。

Grade 5 春学期の学びを振り返って

長い夏休みはどうでしたか。熱中症対策やコロナ対策をしながら楽しく過ごすことができたでしょうか。今月は５年生の春学期を振り返ります。

２年生とのバディ活動

毎年１年生と６年生がバディ活動を行い、６年生が１年生にひらがなや学校生活のことを教えたり、一緒に遊んだりしますが、今年度は２年生と５年生もバディ活動を行なっています。初回は６月でした。５年生は Unit 2 で Body Systems について学ぶ際、初めに「めだかの誕生」を学習しました。ちょうどその時、２年生は Sharing the Planet で生き物について学習をしていたので、５年生がめだか博士になって、ゲストティーチャーとして２年生のバディにめだかについてたくさんのことを教えたりクイズをしたりしました。「２年生、喜んでくれるかな。」と、バディを思いながら一生懸命準備をする５年生の、お兄さんお姉さんとしての頼もしく温かい姿が見られました。バディ活動当日、２年生も５年生も楽しく交流しました。２年生はめだかについて知識を得て、５年生は相手にわかりやすく説明することの難しさを体験しました。

コロナウイルスの影響で他学年との交流ができなかった2年間でしたが、今年度はいろいろな人と関わり、学びを深める1年間になりますように。

Unit 2 Who We Are

UOI は５月末から Unit 2 がスタートし、「体には、健康と命を保つシステムがある。」という Central Idea のもと、生命の誕生や消化器・呼吸器・循環器、骨と筋肉や食生活など、G4～G6 の学習内容と HFL などの他教科と横断をしながら学びを深めました。様々な資料から人体についての情報を収集し、それぞれの器官の役割や繋がり、気持ちにどう影響しているのかなどを新聞にしてまとめました。ウイルスやタバコなど、身近にあるものが人体にどのような悪影響を与えて人を苦しめているのかについて考えたり、食事記録や運動記録を取り、自分達の体の変化をデータにしたり、植物と人間の呼吸や循環の違いを調べたりしました。得た知識からさらに課題を設定して解決する姿がたくさん見られました。Action では「Sports Day でより力を発揮するために」のプレゼンテーションを行いました。これまでに収集した情報を活用したり、足りないと思った情報を集め直したりして、グループでいかに身体能力を活用してチームに貢献するか考えたりしました。

探究は、ただ与えられた課題を解決するものではありません。子どもたちの「知りたい！」という前向きな気持ちを尊重して、自ら課題を設定し学びを深めていくものです。秋学期も、子どもたちにはいろいろなものに触れ、たくさんの「知りたい！」に出会ってほしいです。

DIA LIBRARY からのおしらせ

平和の大切さを学ぶ

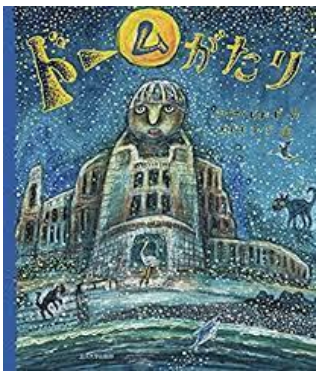
子どもたちの声が校舎に戻ってきました。明るい表情から、子どもたちが充実した夏休みを過ごした様子が伝わってきました。

まだまだ暑い日々が続いていますが、9 月に入り、少し風が涼やかになったように感じます。DIA では、例年 6 年生の修学旅行を 9 月に実施しています。コロナ禍で、行く先を広島と熊本の 2 都市に変更していますが、コロナ禍前の修学旅行と同じく、Unit と絡めて学習を進めていく予定です。6 年生の Unit 3 では「人々は協力し、地球規模の問題を解決する。」をセントラルアイディアとし、SDGs をテーマに学びを深めていきます。特に平和と環境を中心に探究を行い、広島と熊本において、関連施設を訪れることとしています。

DIA ライブラリーでも、9 月は 6 年生の修学旅行での学びをサポートすべく、平和を特集しています。本日はその中から 2 冊の本をご紹介いたします。

「パンプキン」令丈ヒロ子　作
講談社

太平洋戦争中、原爆が落とされる前に、「パンプキン」とよばれる模擬爆弾が落とされていました。これは原爆を落とすための練習だったと言われています。この爆弾の存在を知り、ヒロカはいとことともに事実を調べることに…。



「ドームがたり」アーサー・ビナード　作　玉川大学出版部

「原爆ドーム」でその名を知られる「広島県産業奨励館」。この物語は「原爆ドーム」を主人公とし、「原爆ドーム」から見た広島が語られていきます。「原爆ドーム」は何を伝えるのでしょうか。作者アーサー・ビナードさんは、このお話のほかにも原爆で亡くなられた方の遺品を主人公にした本も書かれています。

9 月の主な行事・予定

1	木	G1, 3, 4 Swimming
2	金	
3	土	
4	日	
5	月	Week 2
6	火	
7	水	クラブ活動
8	木	午前中授業
9	金	2023 年度入試
10	土	
11	日	
12	月	Week 3
13	火	
14	水	委員会活動
15	木	G3 宿泊学習（川上村）
16	金	G3 宿泊学習（川上村）
17	土	
18	日	
19	月	敬老の日
20	火	Week 4
21	水	PYP Meeting のため午前中授業
22	木	
23	金	秋分の日
24	土	
25	日	
26	月	Week 5
27	火	G6 修学旅行（広島・熊本）
28	水	G6 修学旅行（広島・熊本）
29	木	G6 修学旅行（広島・熊本）
30	金	G6 修学旅行（広島・熊本）

10月の主な行事・予定

3~11 日	授業参観
7 日	G1 校外学習
20, 21 日	スポーツデイ
28 日	ハロウィン